

弥生終末における大規模な 東国移住記録の発見

会員番号 10056

白崎 勝

日本の同名同種の山に記録された、東国集団移住記録を発見した。移住集団は西日本各地（沖縄を除く）を出発して、山口県から北海道に至る東国各地に終着地を記録していた。東国各地からの出発も多数記録されていて、2次、3次の移住があったと推測できる。北海道は稚内や択捉島の先までの移住を記録していた。経路記録は出発地と終着地に名付けた2山のみものから、同名や同種の山名を途中経路に多数名付た記録も多く、移住経路として採取した数は1250余となった。

1、発見の経緯

これまで古代人による山への歴史記録は、天孫降臨や二つの東征記録などが見つかっている。地図1は東征の記録で、高取山が出発地、鷹取山が進攻方向である。奈良より西は神武東征、東は日本武尊東征であるが、滋賀県から福井県に北上するT1→T2のみは不明のベクトルであった。

その後、神武東征の神武隊や戦闘部隊、補給部隊等の経路記録が見つかり考古遺跡出土物で検証してきた。東征は、宮崎を出発した神武達の小さなグループでの東征でなく、当時の大王・豊受大神が計画指揮した大倭（おおやまと）建国の事業であることが分かった。豊受大神の経路は稲荷山で記録されていた。（地図2）神武に大王の位を譲ると東国に向かい、移住の支援や励ましをしていたことが見えてきていた。

T1→T2 ベクトルは、東国移住出発の記録であった。

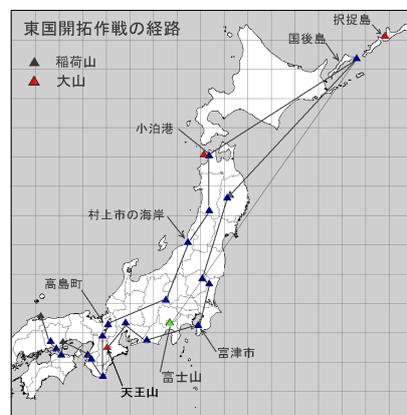
稲荷の神・豊受大神は出雲をスタートに東征を記録し、神武の熊野越えを支援した後、北陸を北上し北海道に渡り、国後島の東端に稲荷山を記録した。その後、太平洋側を南下帰還している。東国に多く見つかる前方後方墳は、開拓を指揮したリーダーに与えた褒美と思われる。

また東北地方で見つかる天王山式土器は、東国移住を支援する部隊が活動した中で遺された土器であることが推測できたが、移住の人達は集団移住なのか、各家々ごとの分散移住なのかが不明であった。

先の神武東征の各部隊経路までが、山に記録されていたことから、同じように移住も記録されている可能性があり、九州にある二つ以上の同名山の分布調査を開始した。



地図1 二つの東征



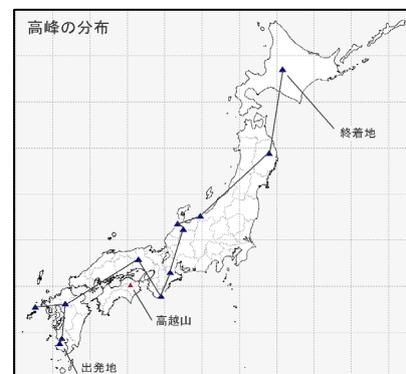
地図2 稲荷神の旅

次々と、九州から東国に伸びる経路が見つかった。さらに中国・四国地方から延びる経路も、東北に向かっていることが判明した。大規模な集団移住の記録だったのである。

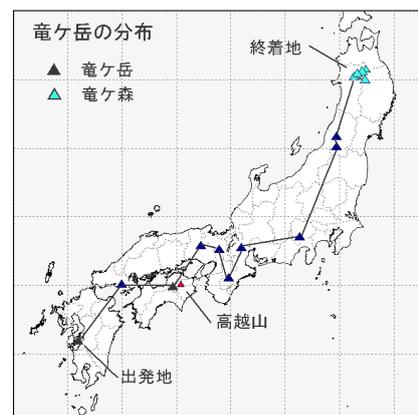
2、調査事例

いくつか調査事例を紹介する。

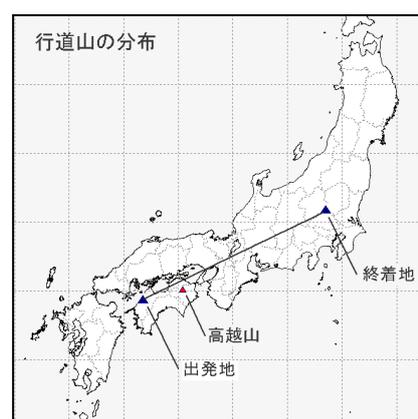
- 1) 高峰 地図3は高峰という名の山の分布を、移動経路と仮定して順に結んだものである。これまで日本の同名山は偶然に各地で名づけられたものとの理解だったが、線で結ぶと偶然ではありえない分布である。鹿児島県出発と長崎県の五島を出発したグループが福岡県八女市あたりで合流し、中国道を進んでいる。途中、熊野に迂回しているが神武の熊野山越えの後を辿ったのかもしれない。この移住は、大きな平野が少ない北陸経路が先行したようで、長野移住も北陸経路がほとんどになっている。
- 2) 竜ヶ岳 地図4は熊本県天草を出発した移住で一旦、四国に渡り、徳島県にある高越山付近に足跡を記録している。高越山は四国で「国生み」という名の開拓の中で、火の事故で亡くなった伊邪那美の陵が山頂にある山である。伊邪那美に敬意を表したもので、岡山より以西の移住経路図の半分以上が表意している。また、奈良山中の天川村にも足跡を伸ばしていて、神武の熊野越えにも敬意を表している。終着地の秋田・岩手県境には岳を森に変えた2次・3次の移動と思われる名づけがある。
- 3) 行道山 地図5は愛媛県から栃木県に向かっている。使用された山名は、重ならないよう予め沢山準備したものを配布したものである。行道山も移住の経路に使うことを想定した名付けと思われる。経路途中や終着地に名付ける場合は、先に名付けている山名と重なる恐れがある。このことは計画段階で予見できることから、これの管理方法も整えた上での移住支援部隊があったと考える。



地図3 高峰の分布



地図4 竜ヶ岳の分布



地図5 行道山の分布

3、県別の出発・終着数

県別の移住出発数と終着数を調べた。また、その差（終着数－出発数）を、その県の移住受入数とした。

表1 東国移住の県別出発数と終着数

県名	出発数	終着数	受入数	県名	出発数	終着数	受入数	県名	出発数	終着数	受入数
鹿児島	49	0	-49	兵庫県	37	15	-22	山梨県	11	33	22
宮崎県	49	0	-49	京都府	23	5	-18	埼玉県	2	10	8
大分県	46	0	-46	大阪府	9	5	-4	群馬県	13	35	22
熊本県	52	0	-52	和歌山	30	12	-18	栃木県	9	21	12
長崎県	86	0	-86	奈良県	18	7	-11	東京都	5	6	1
佐賀県	23	0	-23	滋賀県	4	10	6	千葉県	2	4	2
福岡県	41	0	-41	三重県	13	9	-4	茨城県	10	14	4
山口県	69	3	-66	岐阜県	24	21	-3	福島県	50	100	50
島根県	51	5	-46	福井県	16	13	-3	山形県	28	84	56
広島県	60	5	-55	石川県	19	6	-13	宮城県	18	57	39
愛媛県	43	4	-39	富山県	17	15	-2	岩手県	20	157	137
高知県	40	6	-34	新潟県	61	90	29	秋田県	9	113	104
徳島県	21	6	-15	長野県	48	64	16	青森県	6	90	84
香川県	1	6	-5	愛知県	8	13	5	北海道	14	159	145
岡山県	60	12	-48	静岡県	9	23	14	計	同	1254	763
鳥取県	15	4	-11	神奈川	5	12	7				

移住受入数から、次のようなことが見えてくる。

- 1) 九州7県からは移住の出発のみであった。
- 2) 中国・四国・北陸では終着数より出発数が大であることから、これまでの弥生時代に移住が進んでいたことがわかる。
- 3) 新潟・長野の移住受入数は多いが、新たに北に出発する人も多かった。
- 4) 東北6県の受入数の合計は470で、北海道の受入数145の約三倍であった。
- 5) 関東平野での受け入れ数は、広さの割に少ないように見える。湿地が広がっていた影響か。
- 6) これらの移住数と移住場所は、成り行きによる結果でなく、予め計画されたものと思われる。
- 7) 経路図数には、2次・3次の移住も含まれているので、実質の移住数は移住受入数の合計763集団とした。

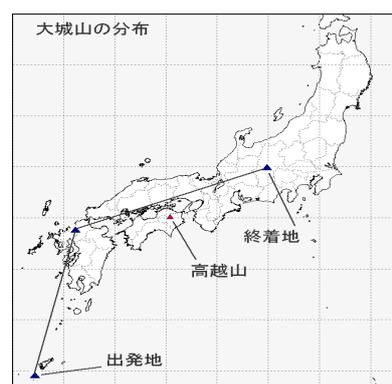
* 調査結果報告書は、主宰する自治会HPの中に掲載しています。訪ねてみてください。
「石神台 ホワイトケープ」で検索した先の「ホワイトケープのギャラリー」の中にある「弥生終末の大規模な 東国移住の記録」(3分割)を開いてください。

4、調査結果の検討

山で記録された東国移住の経路図からは、様々な事柄が読み取れ、検討を試みた。

4-1 東国移住の概要

- 1) 移住の経路図として採用した山の分布図数は 1,254 枚だった。経路途中の名づけも含めた山数は約 5,000 である。全国の山数については、日本山名総覧（白山書房）で 18,032 としているのので、この山数で比率を求めると、全国の山数の約 28% を使用していることになる。
- 2) 一集団の大きさが不明であるが、子供を連れた移動の困難性を考慮すれば、50~100 家族程度が限度と考える。1 家族の平均を 5 人とすると、250~500 人規模の集団が想定される。実質の移住受入数約 763 から、総移住者を試算すると約 20~40 万人となる。ただし、1 次移住に比較し、2 次以降では移住規模が小さい可能性もあり、この場合は総移住者は増加する。
九州からの出発数 346 は全体の 45% に当たる。中国・四国地方には、すでに九州と同等の人数が住んでいたかもしれない。
- 3) 九州にあった倭国の弥生後期の人口について、魏志倭人伝は 248 年頃の戸数を記録していて総戸数は 15 万余戸としている。先のように戸あたり 5 人を用いると約 75 万人になる。九州の先の集団規模で考えると 8.7~17.3 万人の移住である。約 1~2 割の人々が移住した試算となる。
- 4) この大規模な移住は倭国を挙げての活動で、九州が出発のベースとなっていることから、邪馬台国近畿説では説明できない。この大規模な移住では、宮崎を出発した神武による指揮でないことも見えてくる。
- 5) 九州の県別でみると、面積の小さな長崎県からの出発が最も多い。その中で、対馬と五島列島からの出発が目立つ。韓半島南部に住む倭人が東国移住に参加し、対馬・五島列島を出発地としたものが含まれると考えた。中国地方の当時の遺跡からは、朝鮮式土器の出土があるので、朝鮮半島からの移住は整合する。
- 6) 鹿児島県をみると、与論島以北の薩南諸島から 12 出発が数えられ、南端は地図 6 の徳之島の大城山である。これらの出発は、当時の倭国による国づくりの計画がよく伝わり、理解されていたことが分かる。
- 7) 先の分布図の西日本の分布図には、四国徳島にある高越山（こうつさん）を、描き添えた。高越山の山頂には、伊邪那岐と共に「国生み」のため四国にやって来た伊邪那美の陵がある。この高越山を意識して指し示したり、図 6 分布のように、この山の近くを敢えて通過させる経路になっていることが多く見つかったためである。



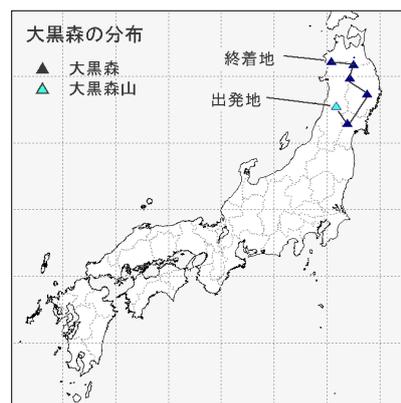
地図 6 大城山の分布

これは建国の活動の中で倒れた伊邪那美に敬意を表す、指し示しと思われる。岡山以西の分布図 702 のうち過半数の経路が該当していた。

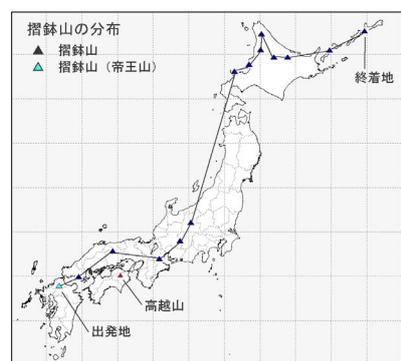
- 8) 東北六県には山や岳でなく〇〇森と、森がつく山が多くみられる。37 を数える。これらは六県の域内を移動していて、北海道に渡った移動には森がついていない。この森のつく山は、1 次移住先の初期開拓が終わり、次の開拓に向かった 2 次・3 次の移動と思われる。谷水を引いたり、扇状地の灌漑水路の計画が終わり、また次の扇状地に移動し開拓の道筋をつけ、後からやって来た人達が稲作などに早く取り掛かれるように準備した開拓のプロ集団ではないかと推理する。
- 9) 地図 8 のような択捉島に渡った移住集団が 11 も見つかると驚かされる。大山津見神が定めた国の境をしっかりと守る意欲に満ちた人達なのであろう。大山の名を残すため、厳しい生活の中で命をつないだのである。大王位を退いて間もない豊受大神が、国後島にやってきて稲荷山を残したことも、大きな励ましになったと考える。
- 10) 最近の遺伝子研究から斎藤成也（国立遺伝学研究所）は、日本人の DNA 解析から「縄文人と弥生人は古墳時代に東北で出会って混血が始まった」と報告している。現在の多くの日本人の DNA に記録された混血は、今回の大規模な集団移住の結果と考える。

4-2 使用された山名について

- 1) 九州各県の終着地県数を調べてみた。(表 2) 同一県からの出発が同一地方に集中することなく各地に分散している。他のどの県を見ても終着地が分散していることから、予め行き先は計画されていたと思われる。
- 2) 1200 余りの山名が混同することなく名付けられていることから、予め準備した山名が移住集団に配布されて使用されたと思われる。
さらに、途中経路や終着地での名付けも、重ならないような管理を行っていたことが推測できる。
- 3) その山名を見ていくと、現代の日本人の姓に使われている名が多いことに気付く。これは明治初期の苗字付加の動きの中で、地名を用いたものが多いことから、近くにあったこれらの山名も用いられたのであろう。



地図 7 大黒森の分布



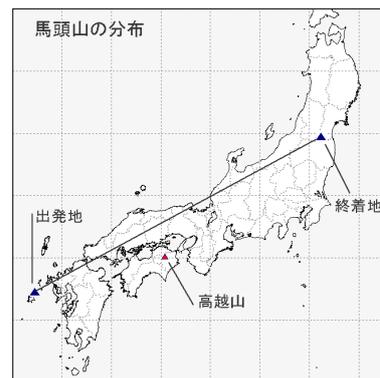
地図 8 摺鉢山の分布

表 2 終着地県数

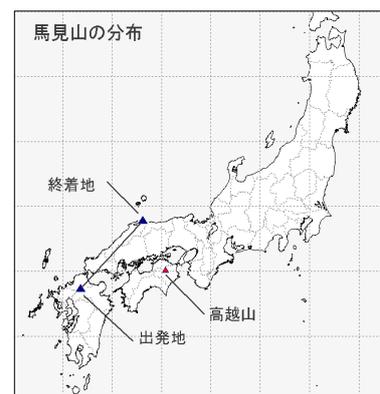
出発県	終着地 県数
鹿児島県	16
宮崎県	21
大分県	19
熊本県	22
長崎県	24
佐賀県	11
福岡県	20

4-3 馬の渡来について

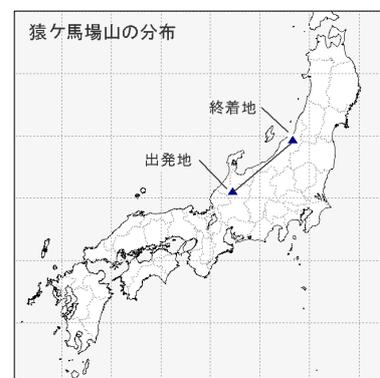
- 1) 馬の文字を用いた経路記録が7点あった。
- 2) 東大阪地方の五世紀半ばころからの遺跡で、馬の骨や馬具が出土していることから、馬の普及はこのころからとみられている。馬の普及には、沢山の馬を大陸から運ぶか、舟で運搬できた馬を年数をかけて繁殖させるかである。
- 3) 魏使来倭時の248年頃には、馬はいないと記されている。その後の、弥生末期での馬來倭説がある。今回の馬の東国移動の記録は、この説を裏付けている。頭数を増やし普及させるために、来倭した馬を放牧地の多い東北・北海道に移動させたのかもしれない。
- 4) 五島列島の有福島（新上五島町）にある馬頭山が出発地になっている。これは朝鮮半島からの運搬が対馬経由でなく、済州島経由を示唆している。小舟では運搬が難しく潮の流れを利用したのだろう。山名に馬頭を用いたのは、大事な馬への、馬頭観音への祈りの意味があると考えられる。
- 5) 馬頭山（地図9）は福島県国見町付近の馬頭山に続いている。
- 6) また馬見山（地図10）の名付けは、初の来倭にふさわしい。一部の馬を倭国の都があった朝倉と、出雲に連れていき倭国の上層部の人々に見せたのだろう。
- 7) 猿ヶ馬場山（地図11）の経路で、福島への道が岐阜の白川郷を経て、新潟から阿賀野川を遡り福島に進んだことが分かる。
- 8) 福島からは2次移動として、岩手、青森、北海道に分散移動している。福島で一旦、繁殖を行い繁殖技術を習得して分散繁殖させたかもしれない。岩手の芦毛馬立山では、白い毛並の馬がいたと記録している。
- 9) 馬は春に一頭を産むのが通例である。一般的に4歳頃から産みはじめ、生涯に12頭前後を産むことから、平均10年後には半数6頭の牝馬が誕生することになる。繁殖により6世代後の60年後には、牝牝合わせて9万頭余りの試算になる。
- 10) 西暦300年頃の、この東国移住から馬が普及し始めた五世紀初頭までの100年・10世代の繁殖期間は、充分



地図9 馬頭山



地図10 馬見山



地図11 猿ヶ馬場



地図12 馬立山

な期間があったことになる。

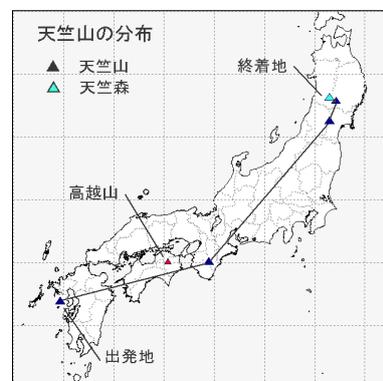
11) 舟での、多くの馬の運搬は困難なことから、東国開拓を見据えた繁殖計画と考える。

4-4 宗教系文字を用いた経路

1) 阿弥陀山、釈迦ヶ岳など宗教系文字を用いた、経路図が 50 余り採取された。

2) 仏教の伝来は 550 年頃とされているので、弥生末(200 年代末)のこの時の仏教文字は従来の歴史認識では違和感が生じる。ここでは東国移住の経路とすることを保留した。

3) 右の天竺山(地図 13)の分布は、これまでの分布と同じように九州を出発し東国に向かっている。途中、高越山も意識した経路で、最終地では森を用いた天竺森も見える。



地図 13 天竺山

4) 経路図に用いた文字は、この時代の文化の一端を表現していると考え。

5) インドから中国への仏教の伝わりは、一世紀半ばころとされている。それから 200 年以上を経過しているのに、漢字伝来とともに仏教系文字が伝来していても不思議ではない。

6) この経路図山名を考案した人達は、漢字をマスターした人達で、知識として習得した文字を利用したかもしれない。インドのサンスクリット語を表現する梵語が多い特徴がある。

5 東国移住を推進した台与(豊受大神)について

十三歳で倭国王に抜擢された台与(とよ)こと、後の豊受大神は高天原の神々の末裔や倭国の人々の悲願である大倭(おおやまと)建国に生涯をかけて応えたことになる。女性の卑弥呼と台与は結婚することなく、帥升(すいしょう)こと国常立尊(くにのとこたちのみこと)が建国した倭国の王を、神武に引継ぎ今に続く皇統としたのである。

年端もいかぬ少女がなぜ、このような大事業を行えたのか、振り返ってみる。

魏志倭人伝が台与は、卑弥呼の宗女(兄弟の娘)と記してるように、卑弥呼(天照大御神)の兄弟・須佐之男の娘であった。九州を飛び出し出雲を開拓した須佐之男は、今一人の兄弟の月読尊に比べ、倭国内では人気があったらしく出雲での伝承が多く残っている。

卑弥呼亡き後、男王を立てたが国中は不服で戦いが起きてしまった。その中で、台与擁立に活躍したのが和久産須巢日(わくむすひ)神であった。卑弥呼共立と記される、天照大御神の擁立に貢献した高木産巢日神・神産巢日神と同じ、産巢日神である。

日本書紀・古事記を読み解いていくと、和久産巢日神の活躍はこのようであった。

1~3 世紀、福岡県春日市付近にあった奴国は、西暦 57 年、神産巢日神の祖先が後漢

から金印「漢委奴（かんのわのなの）国王」を得て正式に奴国（なこく）王と認められた。一方、壹岐を経て糸島付近や筑紫平野に進出していた伊都国の王・帥升（国常立尊）は、西暦 107 年、後漢に朝貢し、倭国王の称号を得た。このことから奴国連合（奴国・不弥国）と伊都国連合（伊都国・邪馬台国・壹岐国）の争いが生まれ倭国乱となった。このとき倭国乱から避難する人が発生し、中国・四国への移住がうまれた。

184 年頃、終わらぬ乱を憂い、邪馬台国王・高木産巢日神と奴国王・神産巢日神は、話し合いを提案した。この話し合いのクニ代表が、古事記に記す「別天つ神五柱」であった。（表 3）

伊邪那岐・伊邪那美の名は、クニ名から一文字ずつ採った名で、この話し合いや倭国統一の象徴である。

表 3 伊邪那美・伊邪那岐の由来

名前	クニ名	クニの代表
伊	伊都国	天之御中主神
邪	邪馬台国	高木産巢日神
那	奴（那）国	神産巢日神
美	不弥（宇美）国	宇摩志阿斯訶備比古遲神
岐	一支（壹岐）国	天之常立神

話し合いは「伊都国王家の男子と奴国王家の娘が結婚し、生まれた子を倭国の王とする。」であった。そこで候補の男子と女子が呼び出され、互いの仲が進み結婚にいたるよう、神々は二人に「国生み」を命じた。二人は別々に船で出発し、瀬戸内海を進んだ伊邪那岐の船団と、四国沖を進んだ伊邪那美の船団は淡路島付近で再会し結婚した。産まれた第一子は不具であったため、第二子の天照大御神が後に王となった。

二人による国生みという名の開拓は、先に移住した人達を励まし四国・近畿一円に及んだ。また伊邪那美は開拓で活躍した人々に神の称号も与えていた。その伊邪那美が末子の須佐之男を連れ熊野開拓に向かっていた時、迦具土神へ神の称号を与える段で火の事故に遭遇してしまった。衣に火が付いたのかもしれない。迦具土命神は、伊邪那美を熊野早船で徳島の開拓拠点へ運んだが、甲斐なく船上で亡くなった。知らせで西摂から駆け戻った伊邪那岐の怒りにより、迦具土神は、殺されてしまった。

十三歳の台与擁立に活躍した和久産巢日神は、この迦具土神と埴山姫との間に生まれた娘であった。この時はまだ子供で、須佐之男とは幼馴染だったと思われる。埴山姫は、夫を火の事故の責任を取らされ伊邪那岐に殺されてしまったが、恨むことなく伊邪那美の死を悼み図 1 のような、半分を伊邪那美と見立てた分銅型土器を

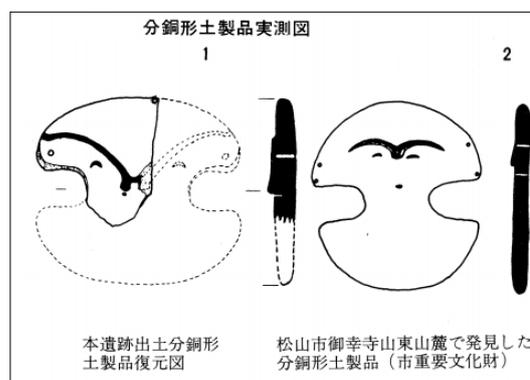


図 1 分銅型土器

沢山造り、人々の記憶にとどめる活動をした。

その下で育った和久産巢日神は、伊邪那岐の九州帰還と共に戻り、天照大神が倭国王になって須佐之男が出雲に向かうと、その後を追った。お幼馴染を慕ってのことだったが、添うことはかなわず、時の英雄・大山津見神との間に神大市比売をもうけた。この神大市比売と須佐之男との間に生まれたのが、倭国二代目の女王・台与こと豊受大神である。別名、宇迦之御魂（うかのみたま）神とも呼ばれる。出雲は安来市にある宇賀荘（うかしょう）の出自と思われ、村の誇りの意でそう言ったのでだろう。

天照大御神が亡くなり、高天原は男王を立てるが国中は不服で、こもごも千人の誅殺があった。如何ともし難くなったそこへ、出雲から13歳の娘・台与を連れて、和久産巢日神がやって来た。

阿波、吉備そして出雲の国生みを生きてきた、和久産巢日神の国を思う心に高天原の人々は、心動かされたものと思われる。無実の罪で父・迦具土神を伊邪那岐に殺されたことも、またこれを恨むことなく、伊邪那美の記憶を留める活動をしていたことも高天原は知っていた。

そんななかで和久産巢日神は13歳の娘擁立による、この先の国づくり戦略を提案したものとする。神武東征の結果からその内容を考えてみる。

- 1) 高天原を「東の方の国の中心地」に遷して、新しい国を造るには周到な準備が必要で、これまでのような準備のない男王を立てても達成できない。まして病弱な鵜茅草葺不合命では難しい。
- 2) 台与に他国の建国の歴史での失敗や、国際情勢、文字、測量技術などあらゆることを学ばせて、東国を十分に調査したうえで問題点の対策を練って、準備する必要がある。
- 3) 高天原を東のクニの中心に置いただけでは、何もできない。倭人のいない日高見や蝦夷の国にも倭人を送り豊かな国にしなければ、高天原は支えられない。
- 4) また出雲国が協力しなければ、移住部隊が通過することも困難である。未だ達成できない出雲国譲りである。須佐之男の娘である台与を大王にすることで、倭国は一体になることができる。
- 5) 30歳を東征の開始と置けば、17年の準備期間がある。高天原を国の中心に置くまで7年、移住がほぼ完了するまで20年、台与50歳までの長期計画とする。新しい王には、鵜茅草葺不合命の子の中から選んで、台与の大王位を委譲する。

13歳台与の健康や人となり、大王になったとしての国づくりへの考えなど、あらゆる検討が何日も行われたであろうことは容易に想像できる。そして、和久産巢日神の提案に掛けたのである。こうして大倭建国はスタートした。

以上

著書：たかとりが明かす日本建国（2010年）
岡と丘が明かす天孫降臨（2016年）
伊邪那美岐が明かす国生み（2018年）